



TITLE:

Germania-Romana(2): 「ゲルマン  
vs.ローマvs.ケルト」という図式

AUTHOR(S):

河崎, 靖

---

CITATION:

河崎, 靖. Germania-Romana(2): 「ゲルマンvs.ローマvs.ケルト」という図式. ドイツ文学研究 2001, 46: 39-62

ISSUE DATE:

2001-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/185450>

RIGHT:

# Germania-Romana (2)

## 「ゲルマン vs. ローマ vs. ケルト」という図式

河 崎 靖

### 目次

序. 国家を越えた方言としてのオランダ語

1. ゲルマンとラテンの間で

— 低地諸国（オランダ、ベルギー）の言語事情 —

1 - 1. ゲルマン語内でのオランダ語の位置付け

1 - 2. ベルギーの言語事情 <以上, 前回>

2. 「ゲルマン vs. ローマ vs. ケルト」という図式

2 - 1. ゲルマンとローマの境界線の成立

2 - 2. オランダ語の史的発達 <今回>

3. ゲルマン語のローマ、ケルトとの接触

3 - 1. ベルギーの言語境界線

3 - 2. 新たなる地名学の可能性 <次回>

## 2. 「ゲルマン vs. ローマ vs. ケルト」という図式

本章の目的は、ヨーロッパ全体を版図とする歴史地図を思い描き、ゲルマン語を歴史的立場からラテン語やケルト語と対比する形で通時的に記述しようということである。ヨーロッパの変動の中、ローマ側の歴史の記述に登場する脇役的なゲルマン人ではなく、あくまでゲルマン人を主体にして、ヨーロッパ史におけるゲルマンとローマ・ケルトの関連の中に見出さ

れるゲルマンの特徴を浮かび上がらせようというのが目標である。紀元前52年、ガリアの総大将ウェルキンゲトリクス<sup>1)</sup>がローマへ反旗を翻し、迎えた最後の決戦の地アレシア（フランス東部、今日のモン・オークソア。パリとディジョンを結ぶ線上）において敵将カエサルに最後のとどめを果たせなかったのは、ローマ軍の中、ゲルマン人傭兵による騎馬部隊の勇猛果敢な戦いぶりによるところが大きい。カエサルは、属州からもローマからも軍勢補充の道を失ったこの時、ラインのかなたからゲルマン騎兵を召集したのであった。この例が示す如く、ゲルマン人とローマ人とケルト人の関係を捉えることは一筋縄ではいかず、いかにも「ゲルマン：ローマ：ケルト」の図式は決して単純なものではあり得ない。

古代における蛮族の侵入の実体とは言えば、単純に飢饉などの原因のため他部族を掠奪目的で襲撃するという場合がほとんどであり、近代以降のように、すでにできあがった国境線上で一進一退を繰り返し、主権と領土を主張して競い合い、それぞれが相手国の民と戦っては自国の文化を押し付け合うという構図ではない。ローマの歴史とは、初期を除けば蛮族の侵入の歴史と言ってもいいくらいである。紀元前113-101年にローマ帝国はキンプリ族・テウトニ族といったゲルマン人に初めて攻撃を受けて以来、ローマ人は対ゲルマンの防御としてアルプス山脈を盾とするだけでは安心できないと思い始めていた<sup>2)</sup>。北の方をはるかホルシュタイン・シュレスヴィッヒ・ユットラントを故郷とする民族、キンプリ族（ドナウ川近辺でケルト人を襲撃）、またこの民族の動きに呼応する形でもテウトニ族（原住地：バルト海沿岸）の南下により、ローマ人たちは未だ見たこともない勇猛な民族の存在を実感させられた。ただ、タキトゥス（歴史家、『ゲルマニア』の著者、55-120）と言えども、やがて5世紀（476年）にゲルマン人によって滅ぼされるローマの運命を予感していたわけではないであろう。執筆は紀元後98年、最初のゲルマン人の侵入（上例）以来210年を経た時点で、

改めてゲルマン人に関して警告を発したのであろう<sup>3)</sup>。当時のローマにとってゲルマニアは皇帝にとってもローマ市民にとってもまた当のタキトゥスにとっても重大な関心事であった。『ゲルマーニア』の一節（第33節）を引用すれば次のようである。

「私は願う、彼ら野蛮人（ゲルマン人）の間に、われわれに対する愛情といわなくても、せめて彼ら同士の憎悪が、いつまでも続いてくれるようにと。実際、ローマ帝国の運命が駆り立てている今、幸運の女神が、われわれローマ人に与えてくれるものの中で、敵の不和（お互いの殺し合い）にもまして立派な贈物は何もないのであるから。」

この言説でもって、タキトゥスはおそらくローマとゲルマニアの関係の逼迫していることを悲観的に表現したのであろう。ゲルマニア、その住族ゲルマン人は、およそローマを受けつけないのである。大軍を整え、時には水軍を伴ってゲルマニアの内奥に押し入って有効に作戦を展開しても、その要所ごとに打ち込まれた楔は直ちに投げ返され、嵌めたたがはその度にはち切れる。ローマが戦う敵手の中には東方の有力な諸大国もある。しかしこれらのすべてを凌駕して最も怖れらるべきは結局はゲルマン人に外ならないとするのである。事実、はるかのち、上述のようにいかにも全面的に、ローマ帝国解体の機運は、ゲルマン人によってその発端が開かれたのである<sup>4)</sup>。国原（1996）は、タキトゥス『ゲルマーニア』の訳述の後、訳者による「解説」の中で以下のように記している<sup>5)</sup>。

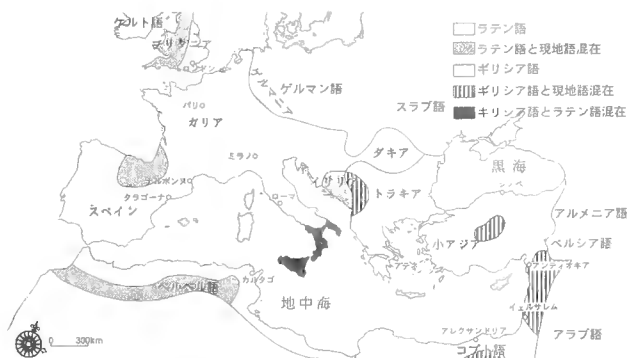
ゲルマン人が世界で最も強力な民族で、ローマにとって最も恐るべき敵であること、それは彼らの政体の「自由（リーベルタス）」と「尚武の精神（ウイルトゥス）」に由来することをローマ国民の肝に銘じさ

せたかったのではないか。ローマ人もかつてはゲルマン人と同様に自由を愛し独立不羈の精神に徹し、勇気を尊び数多くの武勇を誇示してきた。しかるに帝政期に入って、気骨や剛毅を失い、平和の中で柔弱に流れ、勇気すら忘れてしまった、とタキトゥスは、現在のゲルマン人の中に、在りし日のローマ人の姿を懐かしみ、野性に満ちたゲルマン人と文明化し過ぎたローマ人を比較し、時に感傷に浸りつつ、ゲルマニア人の風俗習慣を描いたのが『ゲルマニア』である。

ゲルマン人とローマ人との実質的な接触は、カエサル（前102-44）による占領、すなわち、ガリア北東部のライン左岸、ラインラントのローマ化（紀元前58-51）によって始まった。ラインラントから現在のベルギーにかけては、トゥングリ、トレウェリおよびネルウィイなど、ケルト人と混血したライン左岸のゲルマン人（*Germani cisrhenani*）が定住していた。紀元前16年の皇帝アウグストゥスのガリア行政区の設定では、属州ゲルマニアは未だ存在していないが、彼の軍事行動はライン川を越えてルベ川まで延びていた。紀元後1世紀後半、ローマ帝国はバタウィ人などのゲルマン人らの反乱を鎮圧し、さらにカッティ人を討って、ライン左岸のアグリ・デクマテス *Agri Decumates* を領有した。これにより、ライン川右岸の安全は確保され、上ゲルマニア *Germania Superior* と下ゲルマニア *Germania Inferior* とからなる属州が成立することとなった<sup>6)</sup>。カエサルに相前後する時代以降、ローマ人の常識的な考え方とは、ローマの属州は常に武器でもって守られ安全に保たなければならない、そのためにはライン川を越えたり、ブリタニアに渡ったりする必要性も容易に正当化され得るといったものだった。ゲルマンとローマの境界が基本的にライン川にあるというのはいわば長い伝統に裏打ちされたものでもあった。かつてカエサルがスエビー族（ゲルマン系）の首領アリオウストゥスとの交渉の席

で「ケルト人の保護のためライン左岸へのゲルマン人の移住の中止」を要求したという史実がある。

一方、紀元前1世紀半ば、カエサル<sup>7)</sup>の書いた『ガリア戦記』を読むと、ローマは国家の防衛線をアルプスからライン川に移そうとしていたことがわかる。ここでは、ローマとケルト（ガリア）の関係が問題となる<sup>8)</sup>。ローマ人が初めて本格的な蛮族の侵入を経験するのは、紀元前390年のケルト人の来襲によってである（この時、首都ローマまで占拠され、ローマ側に残ったのは七つの丘の一つのカピトリーノのみという絶望的な状況まで経験させられた）<sup>9)</sup>。つまり、カエサル『ガリア戦記』の先立つこと300年も前からローマとガリアの関係は始まっているのである。紀元前121年にガリア人の連合軍を決定的に撃破してアルペス山脈からロダヌス川（今のローヌ川）まではローマの属州となった。続いてローマ人の経営はケベンナ山脈から（今のセヴァンヌ山脈）に沿って西に伸びた。そしてこの地域の諸部族は軍務を負担しながら、言語、文化、風俗をローマ化されていった<sup>10)</sup>。ガリアは比較的順調に平定が進められ、時に蠢動はあっても、それは却ってその抑圧後のローマ化をさらに促すものであった<sup>11)</sup>。ここで、ローマ時代のヨーロッパにおける言語分布図を示してみよう。



ローマ時代の言語圏<sup>12)</sup>

## 2-1. ゲルマンとローマの境界線の成立

### [略年表]

- 紀元前 390 ガリア人来寇
- 113 キンブリ族、テウトニ族の侵入
- 58 カエサル、ガリアに遠征
- 55 カエサル、ゲルマニア・ブリタニアに侵入
- 44 カエサル暗殺さる
- 27 ローマ帝政始まる（オクタウィアヌス<前63->、元老院からアウグストゥスの尊称を贈られる。-後14）
- 紀元後 9 トイトブルクの戦い
- 43 ブリタニア、ローマ領となる
- 235 軍人皇帝時代（-285）
- 293 デイオクレティアヌス帝、ローマの四分割統治
- 324 コンスタンティヌス1世、ローマ帝国の再統一
- 330 コンスタンティヌス1世、都をコンスタンティノーブルに移す
- 375 ゲルマン民族大移動
- 395 ローマ帝国、東西に分裂
- 476 西ローマ帝国滅亡

紀元前8-7世紀、ケルト人の発祥の地とされている北アルプスにハルシュタット (Hallstatt) 文化が出現する。ケルト人は中央ヨーロッパで貿易ネットワークを築いた。低地諸国もこのネットワークとの接触があったことは、中央ヨーロッパで造られた銅や鉄製剣・金製輪・銅製器・馬具のような地位の象徴とされた製品が低地諸国に現存するこの時代の墓に発掘されていることに表われる<sup>13)</sup>。紀元前5-4世紀になると、同じく北アルプスでラ・テヌ (La Tène) 文化を発達させたケルト部族の一部が西ヨーロッパを中心に各方面に移動し始める。低地諸国にもラ・テヌ文化のいくつかの要塞や居住地が確認されているが、その内の重要な発掘はケッメルベルグ (Kemmelberg, 西フランドル州) の要塞である。高度な技術を用いた金属製装飾品や土器が発掘されていることから、この要塞はケルトの地方貴族の居住地であったことが推測される。城壁内には土器の製造跡がある。

また金属製装飾品の存在は中央ヨーロッパとの交易があったことを示している<sup>14)</sup>。ケッセルベルグ (Kesselberg, 北ブラーバント州) にも城壁と居住の跡があり、発掘された土器はケッセルベルグと同じ特徴を持っている。ベルギーでは同類の土器がほかのいくつかのところで発掘されている。エイゲンビルゼン (Eigenbilzen, リンブルグ州) で発掘された貴族の墓も、ベルギーにケルト人の貴族が居住していたことを証明している。北イタリアで造られた畝模様が施された銅製おけに遺灰が納められている。さらに、同じく北イタリアで造られた注ぎ口のついた動植物のモチーフで飾られている銅製水差しやケルト製タンブラーの金箔を施した装飾輪が発見されている。この墓は紀元前400年頃のものとしてされている<sup>15)</sup>。当時におけるケルト人の各部族の配置、年代順、階級制度などについては研究されているものの、これらの発掘のデータが限られているため、満足のいく研究成果はまだ挙げられていない。海岸地域に位置しているデ・パンネ (De Panne, 西フランドル州) 及びブルッヘ (Brugge, 西フランドル州) にもラ・テーヌ文化の跡をとどめる居住地跡が発見されているが、これらの地方では製塩が行われていた。戦略的な位置を占めていたケッセルベルグ要塞がデ・パンネやブルッヘでの製塩を支配していた可能性がある<sup>16)</sup>。北ブラーバント州及びリンブルグ州のケンペン地方には、平均15～40アールの面積に区画されている40～60ヘクタールのケルト人の農業地跡がある。ハップス (Haps, 北ブラーバント州) などで発掘された集落地はケルト人の生活についてのイメージを与えてくれる。この集落地には紀元前400年頃から紀元前150年まで人々が居住していた。二重に配された柱に支られている長方形の農家が二十三軒確認されている。各農家は間口が11～18メートル、奥行きが4,5～6,5メートルで、長い方の壁面の真中に互いに向かい合った出入口がある。いくつかの建物跡は互いに重なり合っているので、すべての建物が同時に使われていたわけではない。常時使われた農家は3、4軒だけだ



と推定されている。また、柱の数がそれぞれ4本、6本、8本の小さな建物は倉であった<sup>17)</sup>。

紀元前250-100年にケルト人はオビドゥムという城壁に囲まれた小さな都市をフランスからオーストリアまでの広い範囲にわたって各地に建設する。城壁内では金属加工、土器製造などの手工芸が行われた。これらの都市は地中海の地域とさかんに交易を行い、市場としても機能していた。しかし、ベルギーでは大きな農家や要塞以外にこのようなオビドゥムの跡が発掘されていない。このことはベルギーがケルト文化の辺境地域であったことを示している。

ベルギーを含むライン川以南のフランス・南オランダ・南ドイツ・スイスなど居住者の大部分をケルト人が占めていた地域を古代ローマ人はガリアと呼んでいた。ローマのガリア総督カエサルは紀元前58年にこのガリアを侵略し、8年間の戦い（紀元前58-51年）を経てガリア全土の征服を果たす。『ガリア戦記』はこの戦いについてのカエサルによる記録であり、ベルギー地方に居住している民族についてはじめて言及されている資料である。『ガリア戦記』の第1巻でベルガエ人について次のように記述されている。ガリアは全体として3つの部分に分かれていて、ベルガエ人、アクイタニ人、そして自らの言語ではケルタエ人、ラテン語ではガリア人と呼ばれる民族がそれぞれ住んでいる。これらの民族は皆互いに異なった言語・制度・法を持っている。ベルガエ人の住む地域はマトロナ川とセクアナ川でガリア人の住む地域と隔てられて、ローマの属州から最も遠く離れており、商人が訪問してくることもごくまれな地域である。また、ライン川の向こう岸に住むゲルマン人に最も近く、これらのゲルマン人と絶えず戦争状態にある。第2巻ではベルガエ人の大部分がライン川を渡ってきたゲルマン人の子孫であると明記されている。ベルガエ人のコンドルシ族・エプロネス族・カエロシ族・パエマニ族・セグニ族それぞれがゲルマン系

部族であるとカエサルは明白に記している。アトゥアトゥキ族については、ゲルマンのキンブリ族とテウトニ族の子孫であると記されている。同じくゲルマン人について記述している古代著者タキトゥスは『ゲルマーニア』の第28章で、ベルガエ人のネルウィイ族とヘルウェティイ族が自らをゲルマン人と呼んでいることを明記している。

『ガリア戦記』およびタキトゥスの『ゲルマーニア』に記載されているこれらの情報の正確さについてベルギー言語境界線の研究者の間で多くの議論がなされてきた。これまでみてきたようにカエサルの侵略以前のベルギー地方における考古学的発掘はケルト文化の特徴を持つものが主である。古代著者の文献によるベルガエ人部族の大部分がゲルマン起源であるという記述はこの考古学的形跡と一致しない。そのため、考古学および文献学的情報を言語学の観点から検証する必要がある。

タキトゥスのもう一つの歴史書『アグリコラ』(第30章)に見られるよう、「彼ら(ローマ人)は破壊と、殺戮と、掠奪を、偽って『支配』と呼び、荒涼たる世界を作りあげたとき、それをごまかして『平和』と名づける」とある。これは、ブリタニア(今日のイギリス本国、グレート・ブリテン島のローマ時代における呼称<sup>18)</sup>)の原地住民の指導者カルガクスが、ローマの将軍アグリコラと決戦を交える前、部下に向かって演説した時のことばである<sup>19)</sup>。紀元前1世紀中頃、ガリア征服を進めていたカエサルは、ガリア(大陸側)のケルト人を支援していたブリトン人を討つべく、紀元前55年と54年の二度にわたってこの島の南東部に侵入した。カエサルは島の占領までは意図せず引き揚げたが、これは約1世紀後に始まるローマのブリタニア支配(紀元後43年)の前提となったのであった。後に、クラウディウス帝はこの島の恒久的征服に乗り出し、いよいよドミティアヌス帝時代の総督、先述のアグリコラのもと北部を除く島の大半を領有するに至った<sup>20)</sup>。ここに記すように、イギリスではちょうど、大陸でこの当時起こっていた歴

史的経緯のいわば縮図のような図式が成り立っていたと言える。すなわち、当時のウェールズ人（ローマ化されたケルト系民族）とアングロ・サクソン人（ゲルマン系）との関係は、大陸側の Waal「ワロン人」（ベルギー南部、ケルト系）と Vlaams「フランドル人」（ベルギー北部、ゲルマン系）との関係に似ている。大陸から新たにブリタニアに到来したゲルマン系アングロ・サクソン人は、大陸ガリアにおけるように、ローマ化したケルトの人々と接触したのである。ブリタニアのこのケルト人のことをアングロ・サクソン人は Welsh「ウェールズ人」と呼んだが、Waal にせよ Welsh にせよ、いずれも語源的にゲルマン祖語 \*walh-「異邦(人)」に由来し「自らとは違う種族(の)」という意味をもつ。すなわち、自民族とは異なった他部族に出会った場合に「自分達とは違う」（ゲルマン系からすればケルト系であれラテン系であれ）という意で何世紀にもわたってさまざまな諸形で広く使われてきたのであった。Wallonia という名称は、フランス語の話されるベルギー南部に対する呼称として1840年代に入って通用するようになったものである。また、Belgium という語にもケルト人の一部族の名が見出される。かつて、ローマ人が Belgae という部族が現オランダ南部に住んでいるのを発見したことに由来するのである<sup>21)</sup>。

ベルギー国内を走る言語境界線こそが本章の主たるテーマであるゲルマン世界とラテン世界を分け隔てる境界である。このオランダ語とフランス語との言語境界線は、西ヨーロッパにおけるゲルマン系諸言語が話されている諸地域とロマンス(=ラテン)系諸言語が話されている諸地域を分ける長い言語境界線の一部である。オランダ語・フランス語間のこの言語境界線はベルギー王国を南北に真二つに分けている。この言語境界線の北側にオランダ語を話すゲルマン系フランドル人、そしてその南側にフランス語を話すラテン系ワロニー人という異なる二つの民族がそれぞれ住んでいる<sup>22)</sup>。言語境界線はベルギーの法律で確立しているとはいえ、完全な境界線と

は言えない。言語境界線上には両言語を話す人々が住んでいる。「境界線」というよりも「境界地帯」と名づけた方が現実に近い。この境界地域に住む人々に加えて、言語的に特殊な状態にある多言語首都ブリュッセルを含むと、ベルギー人のおよそ20%はこの言語境界地域に住んでいるということになる。ベルギーの言語境界線の起源は、西ヨーロッパの歴史におけるゲルマン文化圏とラテン文化圏との交流史を探る上で重要なテーマであるが、言語境界線成立の問題は複雑な側面を持つことから、その研究史上種々の異なる説がこれまで出されてきた<sup>23)</sup>。ベルギーの言語境界線に関する研究は19世紀に始まる。当時の研究は主にカエサル『ガリア戦記』やタキトゥスの『ゲルマニア』というローマ人による記述に基づいて行なわれた。ただし、これらの資料には不明確な情報が多い。

ゴッドフルワ・クルト (Godefroid Kurth) は言語境界線についての科学的方法による研究の先駆者の一人である。クルトはその研究を『ベルギー及び北フランスにおける言語境界線<sup>24)</sup>』という題名で1896年に出版された書物にまとめている。この書の中で言語境界線の成立史を解明するためにクルトが研究対象として採り上げたのは地名であった。彼は特にローマの要塞 (castrum) に由来する Caestre, Kaster, Kester, Chastre といった地名に注目した。このような地名がバプエ (Bavay) とケルン (Köln) との間にローマ人が建設した軍道に沿って位置している。この軍道は現代のベルギー言語境界線とほぼ一致するので、ゲルマン人の侵略に備えた要塞が連なるように存在していたと主張した。ゲルマン人の大移動はこの要塞の連なり及びベルギーに存在していたいわゆる「石炭森」(kolenwoud) で行き止まり、その北側が、移動してきたゲルマン人の定住地となった。そしてその要塞の境界線が現在の言語境界線となり、後にほとんどその位置を変えなかったという静止説を立てた。しかし、地名の研究範囲が狭すぎて、クルトの説には限界があった。さらに、石炭森がベルギーを南北に分けて

いたというクルトの前提に対して、石炭森はむしろ南北に広がっていて、ゲルマン人とガリア人との間の自然な境界線を形成していたわけではなかったことが後の研究によって証明された<sup>25)</sup>。

クルトの静止説に対して、1920年代にフランツ・ペトリ (Franz Petri) を中心とする研究者たちが動態説を仮定した。ペトリはより広い範囲の地名研究及び考古学的発見を視野に入れることによって、ゲルマン人がクルトが主張したよりもさらに南下していたことを証明した。フランク人はロワール川までガリアの地に進出し、支配層としてだけでなく、農民としても定住した。しかし、これらのフランク人の移民は特に南の地域では総人口に対して少数派であったため、ローマ文化の優越性やキリスト教への改宗運動によってローマ化し、言語境界線が現在の位置まで少しずつ北に移動した。ペトリはこの動きを再ローマ化 (Rückromanisierung) と称した。ペトリが地名研究の対象にしたものの一つに小川名があった。小川はフランク語で *baki* であり、ペトリはロワール川に至るまで *baki* で終わる小川名 (例えば Roubaix, Orbay) を数多く確認し、その数はフランスとベルギーとの国境に近づくにつれて多くなっていることを指摘した。ペトリはさらに、言語境界線の南側に *baki* の近代に近い形 *beke* (Aubecq, Escobecque) を数多く確認し、これらの地名はフランスにおいてフランク人の居住地があったことを物語っていると結論を下した<sup>26)</sup>。しかし、ペトリの地名研究には史料に基づく歴史学的批評が欠けていた。地名も歴史においてさまざまな影響によって変化していく。後の研究では、ペトリが引用しているいくつかの地名は比較的最近になってから付けられたことが判明した。例えば、ベルギーの南部に位置している *source Groesbeck* という泉の名をペトリはフランク語の *beke* で終わる地名として分類しているが<sup>27)</sup>、この地名が Gerard de Groesbeck という16世紀の司教の名前に由来していることがペトリの論文が出た翌年にジャン・ハウスト (Jean Haust) によ

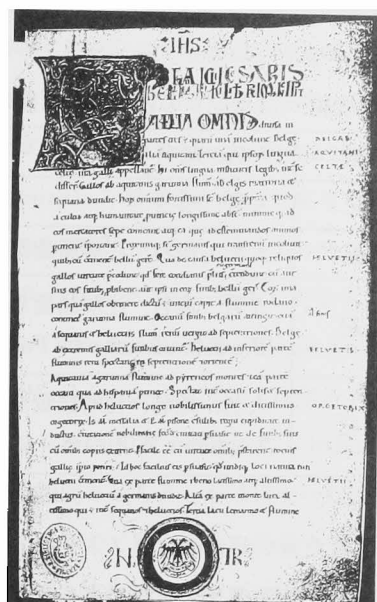
って指摘された<sup>29)</sup>。

歴史学的方法で言語境界線の研究に取り組んだシャルレ・フェルリンデン (Charles Verlinden) は、地名からフランク人の居住密度や居住時期に関する情報をほとんど得ることができないとベトリの方法を強く批判し、前期フランク時代についての史料をより徹底的に分析する必要があると訴えた<sup>30)</sup>。フェルリンデンは特に人口密度に注目した。移動してきたフランク人の数は僅か数万人に過ぎず少なかったため、人口密度が高く、文化的に優れていた南部に居住したフランク人は早い時期に多数人口であるガリア原住民に同化した。ベルギーの北部は土地が豊かでなかったため、人口密度が少なく、ローマからの影響も小さかった。この地域に居住していたフランク人は比率的に多数派を占めていたので、ここでは逆に原住民がその言語と文化をフランク人に同化させた。しかし、フェルリンデンの研究方法は史料に偏り、地名学や考古学の研究成果を視野に入れていなかったため、多くの批判を招いた。その後、ベルギーの北部でもローマからの影響や植民を証明するいくつかのローマの遺跡が発見され、フェルリンデンの理論に大きな打撃を与えることになった。

マウリツ・ヒセリング (Maurits Gysseling) の諸報告は言語境界線における言語学的研究の地位を再び甦らせた。この国際的に有名な言語学者は1960年にその史料に基づいた膨大な地名学的研究成果を『ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ、北フランス及び西ドイツ地名学辞典』<sup>31)</sup>にまとめた。ヒセリングの研究は五つの国を含める広い地域を対象としているので、より包括的な解釈が可能となった。地名に関する情報はすべて一次史料にのみ基づいている。さらに、ゲルマン語やロマンス語の諸方言の音声学的変化を基に各地名を細かく年代順に配列することに成功した。ヒセリングはこの地名の徹底した研究に基づいて言語境界線についての見解を「ゲルマン化と言語境界線」<sup>32)</sup>という小論文にまとめている。その中で低地

諸国には紀元前2世紀にすでにゲルマン人が居住していたことを立証している。カエサルの時代に最後に低地諸国に到着したアトゥアートゥキ族(Atuatuci)はキンブリ族(Cimbri)とテウトニ族(Teutoni)という紀元前113-101年にガリアに侵略したゲルマン民族から出たものであり、守備隊の子孫としてベルギー中部に残っていたことがカエサルの『ガリア戦記』で伝えられていること、また北フランスでは紀元前2世紀にケルトの埋葬方法が北方から伝わった火葬に変わったことから、紀元前3世紀から紀元前2世紀にかけて低地諸国はすでにキンブリとテウトニの侵略によってゲルマン化の影響を強く受けていたと考えられる。この時期はちょうどゲルマン語における p, t, k から f, θ, h への子音変化と重なる。ヒセリングはその子音変化を地名に追うことでゲルマン語地域拡大の地図を作成した。ベルギー北部もローマ時代にローマ化された。5世紀にフランク人の侵略があり、8世紀に言語境界線ができる。この言語境界線は西と東ではかなりはっきりしていたが、ベルギー中部では二言語地域がメロヴィング王朝時代を通じて存在していた。やがて11世紀から12世紀にかけてロマンス化の動きが起こり、それによって二言語混在地域が次第になくなり、北フランスのゲルマン語地域もロマンス語化した。

上で見てきたように、ベルギーの言語境界線の成立は複雑な問題であり、様々な研究分野からさまざまな見解が示されていた。そのうち現在ヒセリングの説は現代最も有力な説として認められている。本章は、言語学、文献学、考古学の各分野の研究を総合してこのヒセリングの研究成果を軸に言語境界線の成立史を考察した<sup>32)</sup>。



『ガリア戦記』の写本

(12世紀、フィレンツェ・リッカルディアーナ図書館蔵)

## 2-2. オランダ語の史的発達

古文献を調査する場合、西洋においてはどうしても聖書関係のテキストが多い。ゲルマン語系の諸語についてもやはり聖書の断片がその言語の最古のまとまった文献であるというケースが多く、オランダ語の古い段階である古低地フランク語に関しても、旧約聖書の『詩篇』の、ラテン語との対訳が今日まで残されている最古のテキストである。名を『ヴァハテンド・シク詩篇』(Wachtendonck'sche Psalmen)という。下表のように、より古



くは人名、地名しか記録が残っていない時期が続き、ようやく10世紀になってこの文献が登場する<sup>30)</sup>。

中世前半（7世紀～11世紀）の古フランク語による文献

7世紀	人名、地名
8世紀	人名、地名
9世紀	人名、地名、注解語彙集
10世紀	人名、地名、注解語彙集、 'Wachtendoncksche Psalmen'
11世紀	人名、地名、注解語彙集、 'Leidener Williram'

低地フランク語で書かれた古い時代のテキストがほとんど在証されないため、歴史言語学では、その時期のラテン語によるテキストの中に残されているオランダ語の名称や語句注釈に頼るしかない。そうした名称として挙げられるには、例えば次のような地名である: Twente, Kennemerland, de Betuwe。その意味で、9-10世紀のヘント(Gent)のラテン語文書における低地フランク語の固有名詞を研究したマンション (G.Mansion) の『古ヘント固有名詞研究』(Oud-Gentsche Naamkunde) は、最古のオランダ語に関する情報源として欠かせない。また、例えば『サリ法典』(Lex Salica) のようなラテン語テキストに含まれている、典型的なゲルマンの法概念を示すゲルマン語彙は、また別の意味で重要な情報源である。しばしばゲルマン語による語句注釈、すなわちラテン語テキストをよりよく理解するために写本の行間や余白に書き込まれた注解が残されていて、ゲルマン語のまとまった文献が欠如している状況をわずかながらも補っている。例えば、先ほどの古低地フランク語文献である『ヴァハテンドク詩篇』の一部分は、そうした形で今日まで伝わっている。こうした乏しい資料しかないに

もかわらず、古オランダ語の文法をまとめようとする試みがなされている<sup>34)</sup>。古オランダ語の文法を記述するとは、すなわち『ヴァハテンドンク詩篇』というテキストの文法を記述することである。『ヴァハテンドンク詩篇』は、別名『カロリンガー詩篇 (Karolinger Psalmen)』とも呼ばれ、おそらくリムブルフ (Limburg) 方言で書かれたであろうと推定される、ラテン語 (Vulgata) からの行間訳である<sup>35)</sup>。『ヴァハテンドンク詩篇』のオリジナルの写本はすでに失われ、そこから派生したと考えられるいくつかの写し (Abschrift) が残っている。16世紀、Liege (ベルギー) の司教座聖堂参事会員、Arnold Wachtendonck が1591年6月から1592年7月まで Justus Lipsius (オランダの人文主義者 1547-1606) に貸し与えた資料が、このオリジナル写本を想定させるきっかけになったのであった<sup>36)</sup>。

さて、フランク族がはじめて歴史資料に登場するのは、紀元後256年、国境城壁を超えて北ガリア、すなわちベルギーに入った時のことである<sup>37)</sup>。この時からローマ人はクサンテン (ドイツ西北部) 北部の細長い城壁は放棄し、その代わりに川沿いに城砦を配置するようになった。そして、ローマ人はケルン (Köln) からマーストリヒト (Maastricht)、トンゲレン (Tongeren)、バヴァイ (Bavai) を経由してブローニュ (現在の Boulogne-sur-Mer) に至る重要な道路を守ることにとりわけ腐心しつつ、ガリアの内側に引っ込むようになった。この道路の北側の地域、すなわちオランダ語圏のベルギーとライン川南部のオランダからは、事実上ローマ人は撤退したのである。フランク族は4世紀半ばまでに国境城壁内のかなり大きな地域を獲得していた<sup>38)</sup>。彼らはそこでローマ人と緊密な関係を保ちつつ、5世紀の動乱までは比較的平穏に暮らしていた。彼らはローマ軍に仕え、とりわけバタヴィア族の名はよく知られていた。彼らの文化はローマ文化の影響を大きく受けたのである。最終的に彼らはローマ側から大きな地域を引き継ぐことになるのだが、その地域はすでに高度にローマ化されてお

り、ゆえにローマ帝国に吸収後はガリア・ローマ人と呼んだほうがよいケルト人が定住していた。ケルト語はローマの影響のもとに消滅する運命にあったが、ゲルマン語はライン川の兩岸で温存されることになったのである。しかしゲルマン語はかなりの新しい語彙を、自分たちが新たに征服した土地に古くからあったガリア・ローマ基層から採り入れることになった。フランク族がローマ人から借用した種々の語彙は、ゲルマン文化におけるローマ世界からの遺産がいかに大きいかを明瞭に示している。例えば、ezel「ロバ」(羅 asinus)、keizer「皇帝」(羅 caesar)、keuken「キッチン」(羅 coquina)、kool「キャベツ」(羅 caulis)、molen「粉挽き場」(羅 molina)、muur「壁」(羅 murus)、straat「通り」(羅 [via] strata)、tegel「タイル」(羅 tegula) などである<sup>39)</sup>。フランク族メルヴィング朝のクローヴィスがキリスト教に改宗した時期については議論が多いが(およそ496年から506年の間)、ともあれ、クローヴィスが改宗し、彼とともに臣下も改宗すると、そこに文字文化が始まることになった。それはもちろんラテン語の文化であり、フランク族の日常語で書かれたテキストは当初は存在しなかったし、また実際には、歴史上、意味のある文献とみなし得るゲルマン語で書かれたテキストが作られたのはカロリング朝時代だけだった。キリスト教の広まりが西ゲルマン民族のさまざまな方言の文字文化の発達に及ぼした影響は計り知れない。クローヴィスは、508年までにフランク族全体の王になっていた。フランク族は、高度な文明をもつガリア、ローマ民族のすぐ近くに何世紀にもわたって住み、その間に双方の世界を統合したような文化を発展させてきた民族であった。いわば、フランク王国はガリアの地にフランク文化と呼んでいい独特の文化を発展させた<sup>40)</sup>。

フランク族という集団の形成に関しては、1920年代にフランク族の定住史の研究に新しい流れが起こって以来、その影響下に、フランク王国史ひいてはヨーロッパ形成史を巡る議論と相俟って、いくつかの新しい展望が

得られてきた。古い学説では、フランク族の大規模な移動、定住がなされたのは、今日のゲルマン・ラテン両言語境界線の東と北の狭い地帯に限られていたと考えられていた。すなわち、言語境界線の西南部全域つまり現在のロマンス語地域は、フランク族の少数の侵入者がガリアの膨大な人口を屈服させ自らの公法を押しつけることによってフランク王国に編入したものの、被征服民の私法、言語、文化は何も変化しなかったというのが一般的な見方であった。ところが、2—1の章でも見たように、言語学だけでなく考古学、地名学の発達に伴って、フランク族の定住地域は現在の言語境界線をはるかに西に越えてロワールに至るまで及んだこと、その結果、ラインとロワールにはさまれた広大な地域にはメルヴィング時代全体を通じてゲルマン・ラテン両民族の並存、民族的共生、言ってみれば両民族の言語と文化の著しい相互浸透が行われていたことが次第に明らかになってきた。この意味で、今日の言語境界線は、フランク族のラテン世界 Romania への定住開始の時からカロリング時代初期に至るまで続いた両民族の言語的、文化的な拮抗・融合、そして西から東に向かう再ローマ化の過程の終結点として成立した均衡状態の具体的な表われであると見る事ができよう<sup>41)</sup>。

## 注

- 1) ウェルキンゲトリクスの人となりについては、この人物を主人公とした歴史小説『カエサルを撃て』（佐藤賢一 著）に詳しい。
- 2) 塩野 (2000:190)
- 3) タキトゥス『ゲルマーニア』（国原吉之助 訳「解説」S.260-1）
- 4) タキトゥス『ゲルマーニア』（泉井久之助 訳「訳者序」S.7-8）
- 5) タキトゥス『ゲルマーニア』（国原吉之助 訳「解説」S.261）

6) 平凡社『百科事典』

7) ローマの伝記作家スウェートーニウス (G.Suetonius) が綴ったカエサルに関する記述のうち、ガリアやゲルマニアに関係するところを拾い上げると以下のようである (『ローマ皇帝伝 神に祀られたユーリウス』第25節 角南一郎 訳)。

「彼は総督在職 9 年の間に大体次のごとき実績を上げた。ビレネー、アルプス、セパンヌなどの山脈とレーヌス河 (現ライン河) とロダヌス河 (現ローヌ河) に囲まれた、約 64 万平方マイルにおよぶ全ガリアを彼のために尽したいいくつかの同盟国を除いて属州の地位に下げ、年間 40 万セステルティウスの貢税を課した。レーヌス河に橋を架けて対岸のゲルマニア人を攻撃し、彼等に莫大な損害を与えたのはローマ人としては彼が最初であった。また、それまで未知の民族であったブリタンニア人を襲って、これを征服し、金銭と人質をとりたてた。かようにすべてが上首尾に運び、その間不運に際会したのはわずかに 3 回に過ぎなかった、ブリタンニア島で、彼の艦隊が暴風のためにほとんど全滅に瀕したとき、ガリアで、彼の軍団の一つがゲルゴウィアで敗走したとき、ゲルマニアの国境で、彼の副官ティトゥリウスとアウルンクーレイウスとが伏兵に襲われて殺されたとき。」

8) ラテン語でいう「ガリア」とは、すなわちギリシャ語の「ケルト」に相当する。

9) 塩野 (2000:188)

10) カエサル『ガリア戦記』(近山金次 訳「解説」S.4-5)

11) タキトゥス『ゲルマニア』(泉井久之助 訳「訳者序」S.7)

12) 塩野 (2000:15)

13) Roymans (1991:34-49)

14) Van Doorselaer (1981:24)

15) Van Doorselaer (1987:46-47)

16) Van Doorselaer (1987:24-25)

17) Van Doorselaer (1987:25-26)

18) ブリタンニアとは、グレート・ブリテン島の南東部にヨーロッパ大陸から移り住んでいたケルト人の一派のブリトン人 (ラテン語でブリタンニ Britanni) に由来し、ブリトン人の国を意味する。

- 19) タキトゥス『アグリコラ』(国原吉之助 訳「解説」S.255)
- 20) 平凡社『百科事典』参照。さらに北方のカレドニア(今日のスコットランド)にまで作戦が展開された。当時の支配の境界線を今日に伝えるものとして「ハドリアヌスの防壁」がある。ローマの支配により、ロンディニウム(今日のロンドン)など各地にローマ風の都市が造られた。ただし、ローマ化は都市部に限られており、また実質的にもローマの支配はケルト人の社会を根底から変革するものではなかった。ブリトン人の部族国家はローマにより征服された後も半独立的地位と部族制を保った。
- 21) Donaldson (1999:41):「この Belgium という用語は人文主義時代の間オランダ全域を指すのに用いられていたが、1830年に、オランダの南の、オランダ語とフランス語が使われる地域に新しく誕生した王国のために名前が必要となった時に復活したのである。」
- 22) さらに東部の小さなドイツ語地域がこれに加わるが、南北の問題からは独立しているためここでは取り上げない。
- 23) 言語境界線研究史の記述のために原資料の他に、主として Lamarcq & Rogge (1996) を参考にした。
- 24) Kurth (1896)
- 25) Linden (1923:203-214)
- 26) Petri (1937)
- 27) Petri (1937:259)
- 28) Haust & Petri (1938:402-406)
- 29) Verlinden (1955)
- 30) Gysseling (1960)
- 31) Gysseling (1981:100-115)
- 32) 言語学以外の分野からも補足的研究が行なわれている。その中の一つの分野が社会学であるが、ルド・ミリス (Ludo Milis) は「言語境界線の現象に関する文化史学・社会学的考察」で地理的言語境界線の他に社会的言語境界線の存在を指摘している。特に言語境界線の移動において社会の上流層による文化言語としてのフランス語の採用が重要なテーマである。Vgl. Milis (1984).

33) 詳しくは、河崎 (1998:57-9) を参照されたい。

34) Donaldson (1999:151)

35) 現存する写し (Abschrift) は、『詩篇 (Psalmen)』のうちの 1-2, 18, 54-72 の22篇である。写しの名称、保管場所等は次の通りである。

Psalm 1,1 - 3,6 (Leeuwardener Handschrift)

Ms 149

Provinciale en BUMA Bibliotheek (Leeuwarden)

Psalm 18 (Abdruck bei Abraham van der Myle, 1612)

Psalm 53,7 - 73,9 (Berliner Handschrift)

Ms Diez Quart. 90

Deutsche Staatsbibliothek (Berlin, 旧DDR)

Lipsius Glossen (Leidener Handschrift)

Ms Lips. 53

Universiteitsbibliotheek Leiden

Lipsius' Brief an Schottius (Antwerpen市の法律顧問)

Iusti Lipsii Epistolarum selectarum centuria III

ad Belgae (Antwerpen 1602)

Glossen von Psalm 55 (F.W.E. Roth 1894, in ZDF 26, 70)

Glossen in Iusti Lipsi Poliorceticon sive de machinis, tormentis,  
telis, libri quinque (Antwerp : Moretus, 1596, 7)

36) その時の感動の様子を Lipsius が知人 Jan van der Does に宛てた手紙 (1591年8月2日) が綴っている:「ある古いラテン語『詩篇』の中に、サクソン語の行間訳、および、我々の祖先のことばがたくさん書き記されている」。

37) フランク族の起源は、たいていの蛮族の場合と同じく、はっきりしていない。彼らは5世紀末まで政治組織をもつ社会にはなっていなかった。トゥーバント族 (Tubantes) は東オランダ、カニンネファート族 (Caninnefates) はオランダ地方の南北に、バタビア族 (Batavians) はオランダ中部にというようにローマ人がわれわれに伝えるこれら全てのゲルマン民族は、ローマ人が紀元前55年前後これらの地域に到着した頃には、このあたりを占領しつ

つあった (Donaldson 1999:141-2)。

38) ローマ領のガリア地方に勢力を拡大する以前のフランク族の故地は、おそらくはケルンとクサンテン間のライン川の中・下流あたりであっただろう。ひょっとすると北方のライン川とエイセル川との間のオランダ西部に勢力を伸ばしていた可能性もある。ライン川とムース川河口もその当時彼らの手のうちにあったのかもしれないし、あるいはそこは、フリジア族の支配地であったかもしれない (Donaldson 1999:14)。

39) Donaldson (1999:144)

40) Donaldson (1999:145-6,150)

41) 出崎 (1977:65)

## 参考文献

出崎澄男：「フランク族とは何か(上)(下)」『白百合女子大学研究紀要』第13/14号 (1977/1978)

Donaldson, B. C. : *Dutch - A linguistic history of Holland and Belgium*. Leiden 1983. 【オランダ語誌】(石川 光庸、河崎 靖 訳) 現代書館 1999.

Gysseling, M. : *Toponymisch Woordenboek van Belgie, Nederland, Luxemburg, Noord-Frankrijk en West-Duitsland*. Tongeren 1960.

Gysseling, M. : 'Germanisering en taalgrens,' *Algemene geschiedenis der Nederlanden*. Haarlem 1981.

Haust, J. & Petri, F. : 'Germanisches Volkserbe in Wallonien und Nordfrankreich,' *Handelingen van de Koninklijke Commissie voor Toponymie & Dialectologie* XII (1938), p.402-406.

平凡社：『世界大百科事典』

カエサル (Caesar, G.J.) : 『ガリア戦記』(近山 金次 訳) 岩波文庫 1964.

河崎 靖：「『古低フランク語』文法の記述に向けて」『ドイツ文学研究』(京都大学総合人間学部ドイツ語部会) 第43号 (1998)

Kurth, G. : *La frontiere linguistique en Belgique et dans le Nord de la*



France. Bruxelles 1896.

Lamarcq, D. & Rogge, M. : *De taalgrens: van de oude tot de nieuwe Belgen*.  
Leuven 1996.

Linden, H. v. d. : 'La foret charbonniere,' *Revue belge de philologie et  
d'histoire*. 1923.

Mansion, G. : *Oud-Gentsche Naamkunde. Bijdrage tot de kennis van het oud-  
Nederlandsch*. 's-Gravenhage 1924.

Milis, L. : 'Cultuurhistorische en-sociologische overwegingen bij het  
fenomeen taalgrens,' *Ons Erfdeel* (1984), p.641-650.

Petri, F. : *Germanisches Volkserbe in Wallonien und Nordfrankreich*. Bonn  
1937.

Roymans, N. : 'Late Urnfield societies in the Northwest European Plain and  
the expanding networks of Central European Hallstatt Groups,' *Images  
of the past. Studies on ancient societies in Northwestern Europe*.  
Amsterdam 1991.

佐藤賢一：『カエサルを撃て』中央公論新社 1999.

塩野七生：『ローマ人への20の質問』文春新書 2000.

スウェートーニウス (Suetonius, G.)：『ローマ皇帝伝』(角南 一郎 訳) 現代思  
潮社 1974.

タキトゥス (Tacitus, C.)：『ゲルマーニア』(泉井 久之助 訳) 岩波文庫 1979.

タキトゥス (Tacitus, C.)：『ゲルマーニア』(国原 吉之助 訳) ちくま学芸文庫  
1996.

タキトゥス (Tacitus, C.)：『アグリコラ』(国原 吉之助 訳) ちくま学芸文庫  
1996.

Van Doorselaer, A. : 'De Romeinen in de Nederlanden,' *Algemene  
geschiedenis der Nederlanden*. Haarlem 1981.

Van Doorselaer, A. : *De Kemmelberg, een Keltische bergvesting* (Westvlaamse  
Archeologica, Monografieën, 3 ). Kortrijk 1987.

Verlinden, C. : *Les Origines de la Frontiere Linguistique en Belgique et la  
colonisation Franque*. Bruxelles 1955.